栗田工業（6370）企業分析レポート｜作成日：2026年01月11日

【直近5年の業績推移】

決算期	売上高（百万円）	営業益（百万円）	経常益（百万円）	EPS（円）	配当金（円）	寸評
2021.03	267,749.0	31,529.0	29,150.0	169.9	—	安定成長
2022.03	288,207.0	35,734.0	30,079.0	164.4	—	利益水準高
2023.03	344,608.0	29,058.0	30,151.0	179.1	—	利益一服
2024.03	384,825.0	41,232.0	41,686.0	259.7	—	過去最高
2025.03	408,888.0	31,275.0	31,821.0	180.7	—	利益調整

【財務・キャッシュフロー概要】

決算期	営業CF（百万円）	投資CF（百万円）	財務CF（百万円）	現金残高（百万円）	自己資本比率（%）
2023.03	48,631.0	-46,274.0	1,101.0	50,468.0	58.6
2024.03	50,874.0	-35,801.0	-15,337.0	54,009.0	59.4
2025.03	87,760.0	-52,074.0	-25,448.0	62,951.0	61.2

【財務コメント】

営業キャッシュフローは安定的に創出されており、特に2025年3月期は大幅な増加が見られる。投資CFは継続的な設備投資を反映しマイナスが続くが、現金残高は着実に積み上がっており、財務体質は健全な状態を維持している。

【会社概要】

栗田工業は、水処理技術を中核とする総合水ソリューション企業である。超純水製造、排水処理、薬品供給などを通じて、半導体・電子部品・化学・医薬分野を中心に幅広い産業を支えている。

【歴史】

1949年創業。高度経済成長期に産業用水処理で事業基盤を確立し、その後は半導体向け超純水分野へ展開。近年は海外比率を高め、グローバル水ビジネスへ進化している。

【立ち位置】

国内水処理分野のトップクラス企業として、高付加価値領域に強みを持つ。特に半導体製造向け水処理では世界的な競争力を有し、装置・サービス一体型モデルが特徴。

【見解】

中長期的には、半導体投資の回復や環境規制強化を背景に、水処理需要は底堅く推移すると見込まれる。高付加価値案件へのシフトが進めば、収益性の改善余地も大きい。一方で、設備投資の波動や大型案件の進捗遅れが短期業績の変動要因となる点には注意が必要である。

【株価・市場情報】（基準日：2026年01月11日）

株価（円）	PER（倍）	PBR（倍）	配当利回り（%）	信用倍率（倍）	時価総額（億円）
6,862	—	—	—	—	—

【同業他社比較】

銘柄名	株価（円）	PER（倍）	PBR（倍）	時価総額（億円）	特徴
荏原	4,410	27.21	4.20	20,400	ポンプ大手。半導体・環境分野にも展開
オルガノ	13,945	23.75	4.98	6,464	半導体向け純水装置に強み
THK	4,057	45.45	1.44	4,831	直動システム世界首位
カナデビア	1,002	16.86	0.95	1,705	環境・インフラ設備中心
イワキポンプ	2,590	12.00	1.51	582	ケミカルポンプ専業

【投資成功シナリオ】

半導体設備投資の回復が本格化し、超純水需要が拡大。高収益案件の積み上げにより営業利益率が改善し、海外売上比率の上昇が成長ドライバーとなる。

【投資失敗シナリオ】

半導体市況の回復が遅れ、大型案件の延期や価格競争が激化。設備投資負担が先行し、利益率が低下する局面が続く可能性。

【メモ】

半導体市況回復のタイミングと受注動向が最大の注目点。海外比率の推移と利益率改善の持続性を定点観測したい。